

キュプリアヌスにおける「一致」—『カトリック教会の一致』を中心に—

菊 地 伸 二

はじめに

今日、キリスト教において、「一致」というテーマは、果たしてどれほどの重要性を持っているのであろうか。

たしかに、キリスト教の歴史を概観するならば、古代教会においては、ローマ帝国の片隅でキリスト教が誕生し、一方で、長らく帝国のなかで迫害を受けながらも、他方で、公同的教会を成立させていくことに重点が置かれており、その過程において、教会が「一致」しているということは極めて大切なことと見なされていたことは間違いないことである。

また、現代のキリスト教、とりわけ20世紀以降のキリスト教についても、二つの世界的規模の戦争が行われる中で、それぞれの教会・教派は、自らの教会・教派を超えて、互いに協力していくことの必要性を痛感していたことも確かなことである。

しかしながら他面で、教会や教派が増えていけば、そこには互いに異なるさまざまな主義や主張が生じてくることも避けがたいことでもある。

古代教会においても、さまざまな種類の異端が生じた、ということはよく知られたことであって、その中から多様な教えが生まれてきていたことは否定できないことである。

また、今日という時代では、さまざまな価値観が積極的に容認される、いわば多様性の時代でもあり、当然のことながら、キリスト教もそのような流れに巻き込まれているし、むしろ、積極的にそのことを受け入れていこうとしている側面もあるように思われる。

さて、この小論では、そもそも、教会が「一致」ということを主要命題として掲げていた古代教会に遡り、なかでも、教会の「一致」の必要性を強く主張したキュプリアヌスの『カトリック教会の一致』という作品を取り上げながら、その中で叙

述されている「一致」という考えについて、できるだけテキストに即しながら明らかにしたいと思う。

しかしその前に、そもそも教会において「一致」が重要視されてきたことを、ここでは「新約聖書」と、キュプリアヌスに先立つ使徒教父であるイグナティオスを例にあげながら見ることにしたい。

そして最後に、そのような「一致」についての理解が、今日のキリスト教について考える上で有益であると思われることを指摘したい。

そこで以下、次のような順序で論を進めていくことにしたい。

第1章 「新約聖書」における「一致」

第2章 イグナティオスにおける「一致」

第3章 キュプリアヌスと『カトリック教会の一致』という作品

第4章 『カトリック教会の一致』の概要

第5章 キュプリアヌスにおける「一致」

第1章 「新約聖書」における「一致」

キュプリアヌスにおいて「一致」の考えを検討するに先立ち、彼の思想の源泉となっている聖書、とくに、「新約聖書」に目を向けてみることにしたい。

さて、「新約聖書」において「一致」ということが大切にされていることは改めて指摘するまでもない自明のことと言われるかもしれない。しかしながら、キリスト教において「一致」が重要であることを、やはり「新約聖書」において再確認しておく必要があるだろう。

私たちが、キリスト教、あるいは教会の一致ということイメージするとき、一番に思い浮かべるのが、「使徒言行録」第2章の次の箇所ではないだろうか。

信者たちは皆一つになって、すべての物を共有にし、財産や持ち物を売り、おのおのの必要に応じて、皆がそれを分け合った。そして、

毎日ひたすら心を一つにして神殿に参り、家ごとに集まってパンを裂き、喜びと真心をもって一緒に食事をし、神を賛美していたので、民衆全体から好意を寄せられた。こうして、主は救われる人びとを仲間に加え一つにされたのである⁽¹⁾。(44~47)

原始キリスト教の共同体の姿は、おそらくこの叙述のなかにすべて集約されていると見てよいであろうし、その後のキリスト教が「一致」ということを考えるときには、絶えず参照され、遡られるべき原点とも言える箇所であろう。

ここには、いわゆる私有財産を主張することなく、財産を一つにしている様子、また、心を一つにして神に向かいながら、仲間と時を一つにしている様子、そして、そこに加わっている人びとも間違いなく一つの仲間になっていく様子が描かれている。

ところでこのような「一つになっている」姿、それは「一致」を示すものと見做されるが、そもそも、キリスト教がこれほどまでに「一つ」ということにこだわるのは何故だろうか。

これについては、やはり、キリスト教徒がその師として崇めるところのイエス・キリストの生き方が関係しているように思われる。

「エフェソの信徒への手紙」第2章には次のような言葉が見られる。

実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、ご自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、規則と戒律づくめの律法を破棄されました。

こうして、キリストは、双方をご自分において一人の新しい人に造り上げて平和を実現し、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させ、十字架によって敵意を減ぼされました。……このキリストによってわたしたち両方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことにできるのです。(14~18)

キリストが受肉してこの世に來られたこと、真の律法の精神を回復しようとして語り行ったこと、そして、十字架上で苦しみを受けて死んだこと、こうしたことの意味について語った箇所と考えることができるが、ここには、わたしたちがキリストにおいて一つになるということが言われて

いる。

「新約聖書」においては、少なくとも、今あげた二つの箇所から、教会共同体における「一致」について、また、その「一致」の源泉としてのキリストの「一致」を目指す生き方があることを、わたしたちは知ることができるであろう。

第2章 イグナティオスにおける「一致」

ついで、「新約聖書」の次の時代に位置づけられる使徒教父の中から、とくに、「一致の司教」とも言われるイグナティオスを取り上げることにしよう。

彼は、アンティオキアで活躍した聖職であり、最後は司教として殉教したと伝えられている。彼の作品は、複数の地域の教会に宛てて著した「書簡」から成る『書簡集』として残されている。

次にあげる「書簡」では、いわゆる、司教（監督）、司祭（長老）、執事（奉仕者）という三職位についての言及がなされており、もっとも初期の言及として歴史的な価値がある資料でもある。

父に対するイエス・キリストのように、みなさんは、司教に服従し、また、使徒たちに対するように長老団に服従しなさい。そして神の戒め同様に、執事に敬意を払ってください。けっして、教会のことを、司教なしに営んではいけません。ユーカリステシアは司教またはその代理のもとに行われた時のみ有効と認めていただきたい。司教のいるところに教会全体があるべきことは、ちょうどキリスト・イエスがおられるところにカトリック教会があるのと同じです。司教をぬきにして洗礼を受けることも許されません。しかし司教の決めることは神のみ旨にかなうので、実行すれば、それは必ず有効です⁽²⁾。（「スミルナの信徒への手紙」8）

司教（監督）、司祭（長老）、執事（奉仕者）という職位または役割については、たしかに、「新約聖書」にも見出すことができる。

たとえば、「フィリピの信徒への手紙」の冒頭は、「キリスト・イエスの僕であるパウロとテモテから、フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たち

と奉仕者たちへ」(1.1)という呼びかけによって始まっている。

また、「テモテへの手紙一」第3章では、「監督の資格」について記されている(1～7)し、「テトスへの手紙」第1章においても「監督」の資質についての言及がある(7～9)。

ただ、「新約聖書」の場合と異なり、イグナティオスの「書簡」においては、いわゆる三職位とみられる「司教」「司祭(長老)」「執事」が一つの箇所、しかも、相互に密接に関連づけられて述べられている。父に対するキリストの服従に類似するものとして、聖職に対する服従について要請されているのである。

もう一箇所、引用することにしよう。

それではみなさんは、もちろんそうしておられるのですが、司教の思いにしたがって歩むのは当然です。と申しますのは、神のみ心になうエフェソの長老団は、ちょうど琴に対する琴線のように司教に組み合わされており、みなさんの共感と愛の調和はイエス・キリストの賛歌になっているのです。どうか、みなさんは、ひとりひとりこの合唱に加わり、神の調子に合わせ、心も声をつにして、イエス・キリストにより、御父を賛美してください。御父はそれをお聞きになり、この善業によってみなさんを御子の肢体とお認めになることでしょう。したがって、つねに神との交わりにあずかるためには、みなさんが完全に一致しておられることが大切です。

(「エフェソの信徒への手紙」4)

ここには、たしかに、三職位はあるものの、その三者の関係は必ずしも明確ではないし、まだ、使徒継承という考えも出てこない。

ただ、単独の司教に従いながら、全体として、「一致」すること、心をつにして「調和」することが強く呼びかけられていることは注目に値する。

実際、イグナティオスの『書簡集』の中には、さまざまな司教の存在が描かれているし、異端、とくにドケティズムの存在も窺える。そのような異端に対しても、司教を中心に、教会共同体が一つになっていくことが必要とされていたことも想像に難くない。

司教制度ということに関しては、次第に、ヘブ

ライ的長老制とヘレニズム的司教・執事制が合流し、司教、司祭、執事の三職位が誕生したと考えられるが、この考察は別の機会に譲るとして、ここでは、三つの職位、少なくとも聖職位というのが、教会共同体の「一致」のための重要な要となっていることを確認しておきたい。

第3章 キュプリアヌスと『カトリック教会の一致』という作品

さて、それではキュプリアヌスとはどのような人物であろうか。彼は、3世紀に北アフリカのカルタゴを中心に活躍した教会の指導者・司教であり、いわゆる教父と呼ばれる人でもある。

生まれは200年～210年くらいまでの間であり、逝去したのは258年と言われている。

彼の生きた時代には、キリスト教は、非合法という形ではあるが、ローマ帝国において次第にその人数を増やしていった。とはいえ、やはり皇帝の政策によって、迫害の危機には常に晒されていたと言えるであろう。

とくに、キュプリアヌスがカルタゴで活躍していたところにローマ皇帝であったデキウス帝は、ちょうど251年がローマ建国1000年ということもあり、伝統的な神々への崇拝を強化するとともに、キリスト教徒に対する組織的な迫害に踏み切ったのであった。その波は、当然、北アフリカにも押し寄せてきた。

このとき、キュプリアヌスは司教としてまだしなくてはならないことがあったため、難を逃れて生き延びた。

迫害は、当然のことながら多くの殉教者を生み出したが、と同時に、棄教者や背教者も生み出した。そのなかには、信徒ばかりか聖職者も含まれており、迫害が終わると、教会に戻ってこようとしたが、キュプリアヌスは彼らに対して厳しい態度をとった。つまり、無条件に戻ることに反対であった。しかしながら、そのような厳しい態度をとるのではなく、積極的な受け入れていこうとするグループも登場したため、両者の間に対立関係が起こった。

教会のなかに、対立が起こるといことこそ、キュプリアヌスにとって遺憾なこと、そしてあってはならないことはなかった。彼は、そのような

教会のなかに、いわばもう一つの教会を作ろうとする人びとに対してひとつの書物を著した。それが、この『カトリック教会の一致』という作品であると言われている。

それでは、この作品にはどのようなことが書かれているのであろうか。次章で、具体的に見ることにしよう。

第4章 『カトリック教会の一致』の概要

『カトリック教会の一致』は全体として27章から成る作品である。章を追いながらその内容に耳を傾けることにしよう。

第1章では、迫害の場合のように、神の僕を圧倒し墮落させようとして公然と戦いを挑み、攻撃をしかけてくる場合は、まだましであると言われる。なぜならば、恐怖の対象が眼前にあって明白な場合、精神が前もって準備できる場合、仇である悪魔が自分の姿を露わにしている場合は用心しやすいからである。問題となるのは、密かに接近し、見せかけの平和で惑わし、隠れた道を這い寄ってくるような、いわゆる「蛇」と名付けられた敵の場合である。その場合には、特に、恐れ警戒しなければならない、と言われる。

ここには、そもそも『カトリック教会の一致』が著された意図が記されていると言えよう。すなわち、カトリック教会の在り方に異議を唱え、新たに、グループを作ろうとする背教者たちの動きが念頭に置かれており、その人びとに対して、教会の内部の者は十分に用心しなくてはならないのである。

キュブリアヌスが生きたローマ帝国においては、いまだキリスト教が公認されていなかったのであり、キリスト教に対する迫害が、公然と、また組織的に行われていたのであった。彼自身は、そのような迫害のなかで聖職の地位にあったのである。したがって彼は、そのような迫害の恐怖を十分に知っていたわけではあるが、ここで扱われている背教者たちは、ある意味でそれよりも厄介であることが言われている。

第2章では、第1章で述べられた背教者に対抗するために、何よりも重要なこととして、キリストの掟を守ることが強調される。キリストの掟、キリストの言葉を聞いて行う者は、岩の上に自分

の家を建てた賢い人に例えられる。

第3章では、用心しなくてはならないのは、公然と明示されたものばかりでなく、キリストという名のもとに、巧みなごまかしをもって欺くものであることが言われる。それは、キリストの到来によって、追放された悪魔が新たに考案したごまかしとも言われている。すなわち、悪魔は異端を作り分離をかもしだし一致を分裂させるために、信仰を覆い隠し、真理を捏造するのであり、すでにこの世の闇から逃れることができたとはい込んでいる者を、気づかれないようにしながら、新たな闇で包んでしまうのである。そしてこういうことが起こるのは、真理の源へと帰らず、その泉を訪ねず、キリストの戒めを守ろうとしないからなのである。

第4章では、教会の一致は、主がペトロに対して「あなたはペトロ。私はこの岩の上に私の教会を建てる」と、一人の人物の上に教会を建てたことのうちに源を有することが言われる。

第5章では、教会の上長である司教が、司教職が一つであり分かちえないことを示すために、教会の一致を揺らぐことなく確保し擁護しなければならないこと、また、教会はさかんに成長し、さらに広まっているものの、その源は一つであり、教会はいわば豊かな実りを産み続ける一人の母親であること、そこに属するわたしたちは、いわばその胎内から生まれ、その乳で養われ、その精神で生かされていることが言われる。

第6章では、キリストの花嫁として教会が語られ、汚れのない貞淑な教会は、その中で、わたしたちを守り、産んだ子どもを神の国に渡す役割を果たす。教会から離れていく者は、教会を母として持つこともなく、したがって、神を父としてもつこともできないのである。さらに、ここでは、キリストと父とが一つであること、父と子と聖霊について、これら三者が同じことを証していることが確認され、この一致を保たない者は神の掟も保たず、父と子の信仰を保たない者は、救いも声明を保たないことが言われる。

第7章では、主イエス・キリストの衣服が分かれず裂かれず、完全な形のままの衣服として保たれたことに着目し、この衣服に一致があること、すなわち、上からの、天からの、父からの下った

一致があることが言われる。また、キリストの衣服は、キリストを着た民が分かれずに固く結ばれ、つながっている緊密さと和合を示しおり、その神秘的なしるしによって、教会の一致を明らかに示していると言う。

第8章では、信徒にとって、唯一の教会以外に家はないことが言われる。人が和合をもって住むことができるのは神の家、キリストの教会だけである。調和と純真さをもって留まる場所は他にないのである。

第9章では、聖霊がその形で降ったところの鳩を引き合いに出しながら、純真さをもって和合を保つことが推奨される。

第10章では、現在、世の中に現れている異端について取り上げられ、その歪んだ精神には、平和も和合も存しないことが言われる。

第11章では、そのような異端から、迷っている民を引き留めるように、聖書の言葉を通して呼びかける。異端は、自ら生ける水の源を捨てておきながら、命と救いの水の恩恵を約束するが、実際には、そこでは人は清められることはなく、汚されるだけなのである。

第12章では、聖書にある「二人または三人がわたしの名によって集まるところには、わたしもその中にいるのである」という言葉は、「あなたがたのうちの二人が地上で心一つにして求めるならば、わたしの天の父はそれをかなえてくださる」というその前文と関連づけて理解することが重要であり、主はこの言葉を通して、人数のことではなく、願いごとをする者の「一致」が最も大切であることを示しているのである。教会という一つの体にさえ一致せず、すべての兄弟とも一致しない者が、どうして他の人びとと一致できるであろうか。

主は教会の中から話し、教会のなかにいる人に向かって話をされるのであり、主ご自身が定められた戒めに従って、二人または三人が一致した心、純朴な心で祈るならば、たとえ、それが二人または三人であっても、どんな願いごとでも主は叶えてくださる、と教えてくださったのである。

第13章では、不和のままに祈ることのむなしさを伝えており、キリストの教会の外で集会しているときに、彼らはキリストが共にいると見なすこ

とは空想であると言う。

第14章では、キリストはわたしたちに平和を与え、一つの心、一つの精神をもつように命じられたこと、また、キリストは愛と慈悲の絆を、傷も汚れもなく守るように命じられたことが述べられており、神の教会において、心一つにした和合をもたなかった者は、神とともに住まうこともできないと言われる。

第15章では、主は自らの教えを授けるにあたって、愛を教えると同時に一致を教えられたこと、二つの愛の掟をもって預言者と律法全体をまとめあげられたことが言われる。したがって、不和によって教会を分裂させたり、信仰を分断、破壊したりする者は、どのような一致や愛を保っていることになるのか、と問われる。

第16章では、信仰に立つ人びとに対して、この世の終わりには、敵意に満ちた悪弊、異端の迷い、分裂の滅びといった困難な時期がやってくることを言われる。

第17章では、大勢の背教者が現れるが、そのような者に動揺したり、狼狽したりせず、むしろそのような者を避けるように、と言われる。

第18章では、聖書の記事に基づいて、神の掟に逆らう者とその結末について述べられている。

第19章では、教会の教えに逆らう者とその教えから離れてしまう背教者との違いについて述べられている。逆らう者は、犯した罪を悔い、完全な償いをもって神に心から嘆願する背教者よりも重い罪である。何故なら、教会に反逆するからであり、故意に罪に留まっているからであり、自分だけの不利益を招来する背教者とは異なり、自分だけでなく他の人びとも惑わすからである。

第20章では、信仰告白をした者の中にも、後に神の道から離れていった者がいることが述べられている。

第21章では、信仰告白は栄光への階段の一步であり、それを行った者は、さらに謙遜になることが求められていることが述べられる。それは、キリストが、自らの掟をもって謙遜を教えたことに由来するものである。

第22章では、信仰告白をした者の大部分は信仰の力、神の掟の真理、主の規律のうちにしっかりと立っており、福音のまことの光に照らされて、

主の清い輝きに包まれて、キリストの平和を保つに値する者となったのである。

第23章では、できるだけ一人の兄弟も減びることがないように、母なる教会が一致した民の一つの体を、自分の体に包み込むようにと、教会に対するキュプリアヌスの望み、配慮、戒めが記されている。神は唯一、キリストはただ一人、教会も信仰もただ一つであり、その民は、和合の膠によって、堅固な単一体として結ばれた一つの民なのである。

第24章では、神の子は平和を実現する人でなければならず、わたしたちは心の柔和な者、正直に話す者となり、愛において一致し、和合の絆をもって互いに忠実に結ばれた者とならなければならないと戒められる。

第25章では、使徒たちの中には和合があり、信徒の新しい民の中でも主の掟が守られ、まことの愛が保たれていたことが示され、それを模範とすることが述べられている。

第26章では、前章のような初代の教会に較べると、わたしたちの間では、施しをする精神が退化するのに比例して、和合の状態も減少してしまったことが述べられている。

第27章では、最後に、兄弟たちに、昔の惰眠を振り払い、主の教えを守り実行するように目覚めていることが強く勧められるのである。

第5章 キュプリアヌスにおける「一致」

さて、前章では、『カトリック教会の一致』の概要について一通り見たのであるが、果たしてキュプリアヌスは、この中で「一致」ということについてどのように考えているのであろうか。

『カトリック教会の一致』の第4章では次のように言われている。

主はペトロに言われた。「あなたはペトロ。わたしはこの岩の上でわたしの教会を建てらる。…」主は一人の人物の上に教会を建てられたのである。復活の後に、使徒たちおののと同じ権能を授けて言われた。「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす等」と。それにもかかわらず、主はその一致をよく示すために、全権をもってこの一致の起源は一人の人物（ペトロ）に

由来することを定められたのである。(4)

ここでは、教会の一致ということが主題となっており、その起源をペトロの上に教会を建てたことに由来させている。

たしかに、復活後に、ほかの使徒たちにも同じ権能を授けたのではあるが、そのこと以上に強調されているのは、まずただ一人の人物ペトロに権能を授けたということなのである。すなわち、一人の人物から権威が広がったということに重点は置かれているのである。

また第5章では次のように言われている。

わたしたちはこの一致をしっかりと確保し、擁護しなければならない。これは特に教会の長である司教が、司教職が一つであり、分かつたれないことを示すためである。…司教職は一つであり、各人は全体のために各々の役目をもっているのである。

教会は一つであるが、さかんに成長し、さらに広まっている。太陽のように光線は多いが、光は一つである。樹木のように枝は多いが、一つの強い根の上に幹を据えている。泉から多くの小川が流れ出て、さまざまなあふれるほどの豊かさをあらわしているが、その一致は源において保たれているのである。光る物体から一つの光線を引き離してみよ。光の一致は分裂を許さないのである。木の枝を折ってみよ。ひとたび折られた枝は、芽吹くことはないであろう。流れを泉から切り離してみよ。すぐに干上がってしまうだろう。このように、主の光に照らされている教会もまた、全世界にその光を輝かせているが、それはあまねく降り注ぐ一つの光であって、その光の一致は分かたれていない。教会は、全世界にその枝を豊かに広げて伸ばしている。教会は満々たる流れを注ぎだしている。それにもかかわらず、その源は一つである。教会は豊かな実りを産みつづける一人の母である。わたしたちはその胎内から生まれ、その乳で養われ、その霊で生かされているのである。(5)

ここでは、司教職の一性が、ペトロとの関係で述べられているが、それとともに、キュプリアヌスが非常に好んだ表現である母としての教会のイメージが描かれている。

子宮、母胎を意味する「マトリクス」という言葉こそ用いられていないものの、実質的にはそれと同等のことが言われている。

すなわち、教会の源は一つであって、たしかに複数の教会が存在しているものの、それらはすべて一つのものから流れ出たものであり、同じ命が流れているのである。

引用文中に見られる「光と光線」「泉と小川」「木の根と枝」の例は、たとえ外見的には変化が見られたとしても、そこに流れているものはすべて同じ一つのものであることを指し示している。

そして、教会における一致の象徴として、あるいはその全体に一つのもものが流れ、全体に行きわたっていることの象徴として司教という存在が考えられている。

このことから、教会共同体は、「和合の膠」によって、堅固な単一体として結ばれた一つの民であると言われるのである。(23)

ところで、このように教会が一致することにそれほどまでに固執するのはどうしてなのであろうか。教会の一致の根元には何が置かれているのであろうか。

第6章には、「教会は神のためにわたしたちを守ってくれ、産んだ子どもを神の国に渡す」とある。また、「教会を母としてもたない者は、神を父としてもつことができない」とある。

教会においてわたしたちが一致しているのは、神をわたしたちが有しているからであり、終わりのときには、わたしたちは神のもとに帰ることが言われている。

さらに、第12章では、「主は教会の中から話し、教会内にいる人に向かって話をされる。主ご自身が定められた戒めに従って、二人または三人が一致した心で祈るならば、たとえ二、三人であっても、どんな願い事でも叶えてくださる」と言われている。つまり、神の定めた戒め、掟を守ること、このことにおいてわたしたちが一致していることの重要性がここで確認することができる。神に対する純朴さ、一致した心が何よりも重視されているのである。多数の者の一致しない祈りよりも、少数の者の一致した祈りの方が質的に高いものとされている。

それでは、そのように一致した心をもって祈る

ことがなぜ重視されるのであろうか。

それについては、第14章において、「キリストはわたしたちに平和を与え、ひとつの心、ひとつの精神をもつように命じられたから」と言われている。さらに、第15章においては、「主は自らの教えを授けるにあたって、愛を教えると同時に一致を教えられた。二つの掟をもって預言者と律法全体をまとめ上げられた」とも言われている。

キリストの教え、それは言うまでもなく、愛の教えであり、また、一致の教えでもあるのである。

こうして教会に連なる人びとは、「愛において一致し、和合の絆をもって互いに忠実に結ばれた者とならなければならない」(24)のである。

愛の掟、一致の掟というものは、ただ、頭で理解し受けとめればよい、というものではなく、それは実践的な行為を伴うものでなくてはならない。その意味で、「一致」のためには、お互いが協力しあう姿勢、態度が求められるのであり、キリスト自身がそうであったような「謙遜さ」(21)が求められることにもなる。

キリスト教が公認される以前の3世紀ころまでには、教会はその特性を「一致」にあることに力点を置くようになった。

そしてそのことは、とりわけキュプリアヌスの場合には当てはまると思われる。

『カトリック教会の一致』の原題は、*De Ecclesiae Catholicae unitate*である。ここで「一致」という言葉のラテン語は、*unitas*という。「一つである」ということである。

このことをキュプリアヌスは、*unianimitas*という言葉でも表現する。「思いを一つにすること」「同じ思いが全体を流れていること」という意味である。「一つである」ということが何において「一つである」かということをも端的に示す言葉であるといつてよいであろう。ちなみにこれはギリシア語では、「ホモノイア」と表現され、イグナティオスの文献にたびたび見出された表現でもあった。

また、先にも引用したように、キュプリアヌスは、「マタイによる福音書」18章19～20節の「はっきり言うておくが、どんな願い事であれ、あなたがたのうち二人が地上で心一つにして求めるなら、わたしの天の父はそれを叶えてくださる。二

人または三人がわたしの名によって集まる所には、わたしもそのなかにいるのである」という箇所について、主はこの言葉をもって「人数」のことではなく、願い事をする者の「一致」が最も大切であることを示されたのでであると述べている。

また、「平和を実現する人びとは幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」(マタ5.9)から、神の子は平和を実現する人でなければならない。愛において一致し、和合の絆をもって互いに忠実に結ばれた者とならなければならないとし、使徒たちにはまさにこのような和合があったと述べており、さらにこのような使徒時代の「和合」の状態が、キュプリアヌスの時代には減少してしまったことを嘆いてもいる。

キュプリアヌスの時代には、司教を頂点とする聖職制度もほぼ成立していたと思われる。とくに、外側からの攻撃に対しては、その砦を固めるという意味でも、教会のなかにそのような制度が確立していることは不可欠であったであろう。しかし、他方で、そのような中で、その制度を内側から揺るがす存在がむしろ恐るべきものとして考えられていたように思われる。すなわち、教会共同体における内的な一致というものが、ある意味でないがしろにされていたのではないだろうか。

そのような当時の状況に対して、共同体内部の「一致」の質を、新約時代と比較しながら考察しようとしたその検証の仕方からは、今日のわたしたちもなお学ぶべき多くの点があるのではないかと思われる。

註

- (1) 翻訳に際しては、新共同訳を使用した。
- (2) 翻訳に際しては、G. ネラン、川添利秋共訳『アンチオケのイグナチオ書簡』(1960年、みすず書房)を使用した。なお、原典のテキストに際しては、Sources Chretiennes10, Ignace D' Antioche & Polycarpe de Smyrne, *Lettres & Martyre de Polycarpe*, 1969を用いた。
- (3) 『カトリック教会の一致』のテキストとしては、Oxford Early Christian Texts, *Cyprian, De Lapsis and De Ecclesiae Catholicae Unitate*を使用した。翻訳に際しては、『中世思想原典集成4 初期ラテン教父』(上智大学中世思想研

究所編訳・監修、吉田聖訳、平凡社、1999年)を使用した。

なお、本章の執筆に際しては、同書の解説部分(pp.181-184)を参考にした。

Cyprian on concord in *De Ecclesiae Catholicae unitate*

Kikuchi, Shinji*

教会において「一致」はどのような重要性を担ってきたのであろうか。この小論では、古代教会の、まだキリスト教が公認される前の時代に司教職にあったキュプリアヌスの『カトリック教会の一致』という作品を中心に、この「一致」についての理解を明らかにする。もとより、彼に先立つ「新約聖書」、イグナティオスの思想を継承しながら、彼は、とくに、公同なる教会の一致の象徴としての司教職の重要性を指摘するとともに、教会が数多く増えていっても、その根底には、キリストの教えを守ることによって共通に流れていく「一致」というものがお互いを生き生きとしたものとして結びつけるとともに、そのようにして、異端的キリスト教に対抗することが重要であることを主張した。

キーワード：一致, ユニアニミタス, ホモノイア